

アウグスティヌスの歴史観

宮 谷 宣 史

アウグスティヌスは、存在している、生きている、考える、この3つを人間に最も基本的なものとみなす。存在としての人間は、場所に限定されている。生存しているゆえに、時間的制約下にある。しかし、人間は考えることによって、空間と時間的制限を超えることもできる。ところで、人間は、突然、今、此处で存在し、生存し、思惟しはじめたのではなく、過去においても何処かで同様であったし、又、今後も同じ状態を保持するかも知れない。つまり、人間の存在は現在だけではなく、過去もあり、また未来もありうる。この意味で現在の自分を把握するためには、過去の外的、内的状況について探る必要があり、さらに、現在どのように生きるかを考えるためには、今後進むべき未来を考慮する視点を持つことが大切となる。この意味で人間は歴史的存在であり、したがって人間は歴史的思索を必要とする、といえよう。このような人間理解のなかに、アウグスティヌスの歴史意識がある。彼によると、歴史の問題は人間の自己理解と深く関わっている。

次に、この事態は、一個人だけではなくて、まわりにいる他の人間も同様に、過去をもち、また現在、存在し、生き、思惟し、そして未来も、そうであり続ける、という点では同様である。そして、人間は当然ながら、1人ではなく、他の人間とともに存在し、生き、思惟する。これは過去においても、現在も、未来もそうである。したがって人間は、自分一個人の小さな歴史を問題にするだけではなくて、他者のとの関係のなかで、他者の過去、現在、未来を、また、いろいろな人々の時代の歴史を意識して、そこでの課題についても考えなければならない。そうしなければ、人間としてよりよく生きていけない、と言えよ

う。²²¹⁾

アウグスティヌスの歴史観を問題にしていく場合、幾つかの方法があるが、ここではもっとも基本的な立場で論じていきたい。つまり、彼の著作を幾つか選び、年代順に取り上げ、そこに見られる歴史観を検討していくことにする。

まず最初にアウグスティヌスが司教になってから間もなく書いた作品、『教えの手はどき』（400年）の内容を探ってみたい。

アウグスティヌスは400年ころ、カルタゴの助祭デオグラチアスの質問に答えて、教会において初心者にキリスト教の基本を解説するにはどうしたらいいか、を示すために本書を執筆した。この著作の中に歴史に関する叙述を見いだすことが出来る。

アウグスティヌスは本書の第22章39で聖書の歴史を7つの時代に区分している。第1の時代は最初の人間アダムからノアまで、第2の時代はノアからアブ

註1 ここで歴史の語義について少し説明しておく。

今日、欧米でよく使用される、history (histoire、storia、historie) という言葉は、ギリシャ語の historia に由来する。そしてこの語は、動詞の historew、尋ね学ぶ、調査する、物事を探求する、学び知ったことを話す、記録する、という意味の動詞から来ている。

その名詞が historia で、探求されたこと、調査された事実、を意味する。

もう1つは、ゲルマン系の言葉で、Geschichte がある。これは、起こる、生起する、という動詞、geschehen から来ている。そして、生起したこと、過去の事実をさす。

簡単にいえば、西洋では、1つは、歴史とは、過去に起こった出来事、事柄をさしておける。つまり、過去でどうであったか、という認識としての歴史である。もう1つは、探求された出来事、事柄をさす。これは、調査して捉えた歴史、あるいは記述としての歴史を意味する。

日本語の歴史という言葉について簡単にふれると、まず、暦は、経歴、遍歴、歴代、歴任、などの用法でわかるように、経る、経てきたもの、をさし、史の意味は、史(ふみ)をさす、つまり書物のことであり、また、史書、記録する役人をさす、ふびと(史官)。この史という文字をみればわかるように、人が書物を持ち上げている様を表している。歴史は、したがって、経てきた史であり、記録と関わる。

ラハムまで、第3の時代はアブラハムからダビデまで、第4の時代はダビデからバビロン捕囚まで、第5の時代は移住からイエスの到来まで、第7の時代は安息。これは人類の始祖といわれるアダムからイエスに至るまでの旧約聖書の歴史を五期に分けて論じ、続いてイエス・キリストの到来と神による最後の審判という、つまり現在および未来の2時期にわけて考えている。本書の第17章26節以下にみられる世界の歴史を創世記にある7日間の創造物語と関連づけ、7つの時代に区分して取り扱う方法は、古代教会においてしばしばみられた。これはギリシャ・ローマにおいても、聖書との関連は別としても、歴史を6区分して取り扱う方法があった。本書ではアウグスティヌスも古代教会の一般的な歴史区分にしたがっていると見なうる。

そのなかで興味をひくのは、本書にはギリシャ・ローマの歴史理解とは異なるキリスト教的なものがあること、また、初期のアウグスティヌスの歴史観が伺われる点である。

アウグスティヌスは世界の歴史を記述するさいに、まず、伝統に従い、聖書の人物や出来事をもとにして、特に、イエス・キリストを中心にして時代区分を行っている。これは2つの特色を示している。第一に、聖書の歴史を一般の歴史と関わらせている点である。これは、すでにルカ文書にある歴史観で、また、使徒信条にもみられるものである。キリスト教は、旧約においても、新約においても、神が歴史と関わっている点を重視している。そして特に、神の啓示であるイエス・キリストが人間の歴史のなかに入ってこられたことを信じ、それを明らかにしようとの意識がある。この意味でキリスト教は歴史的宗教だと自覚している。そしてキリスト教の立場から、つまり、イエスを中心にして、一般の歴史を見ようとする。アウグスティヌスも初期においては、この見解をとっていたことになる。

第二の特色は、人類の歴史を、国王やある特定の民族の治世年代を中心とする、いわゆる支配者の在位や元号によって把握、区分するのではなく、イエス・キリストの誕生を中心にしてみる、という立場である。これは、あらゆる民族、国家、人間を相対化しようとする歴史意識のあらわれともいえるし、キリ

スト教中心の歴史観ともみなされる。とにかく、歴史では、時代をどのように区分をするかは、大変重要な問題であり、そこに歴史観が現われてくる。この意味で、初期のキリスト者は自分達の歴史観をつくろうとしていたと言えよう。

そこで第一の特色である、聖書の内容と一般の歴史を関連させて論ずる方法は、人間の歴史を神と結びつけて把握しようとする態度をさすことにもなるが、これには、アウグスティヌスがあとで気づいて、批判するように、問題がある。この点については後述する。とにかくここには、歴史を考えるうえで、キリスト教の独自性を示す面もある。第一に、人間の歴史が人間を超えた神、しかし同時に、イエス・キリストの受肉を通して歴史の中に働きかけた神と関わりつつ進行しているという歴史観。そしてそれは、神が人類を救うために歴史を導いている、という考えかたであり、救済史観である。そこで、一方では、地上の一般の歴史のなかでは、神から離れた人間が、罪のために、悲惨さと虚無におびやかされている、という認識があり、他方では、歴史を導いている力があり、歴史の中で人間を救いに導くために働いている、という歴史観を示している。第二に、歴史が神に導かれているという立場は、歴史は自然なものでも、循環するものでもなく、発展している、という見解と結びついている。第三に、ここには、神が人間を創造した時から歴史が始まり、そして、最後に神による人類の審判がある、という歴史把握がみられる。つまり、ここには、歴史の起源と目標を問題とする古代キリスト教の歴史観があらわされている、といえよう。そしてこの歴史観は、ギリシャ・ローマの歴史観とは異なったものである。たとえば、歴史記述にさいし、ギリシャでは、ヘロドトスも、トゥキディデスも歴史における変化を越えて働く普遍の原理を求めてはいるが、結局循環の法則を主張する。ローマのポリビオスも同じ傾向である。混沌を嫌ったかれらは、歴史の背後に、たとえば、原因結果からなる法則による調和があると考えようとした。なお、ギリシャ・ローマの歴史観のもう1つの特色は、自分の属する民族、国家の歴史を中心にしている点である。そのため、他の民族の歴史を平等にみない、つまり普遍史の立場がない。この点では、ユダヤ人も同じである。

ユダヤ人は、古代では、歴史意識の高い民族であるが、それでも、選民思想をもつゆえに、自らの民族を中心にした歴史観にたっている。

これらに比べると、アウグスティヌスが受け継いだ古代キリスト教の歴史観には、新しい面があるのは確かである。それはここで改めてまとめると以下のような点である。

1. イエスの神は、万人の神である。神の前では、すべての人間は平等である。この立場にたつと、すべての民族は相対化され、したがって普遍史が可能になる。
2. 人間は、自由に意思し、自由に行動するが、しかし、罪があるため、たとえば、意図する善を完全に実行できない。それに、欲しないことも行う。つまり、人間の行為における意図と結果には食い違いがある。従って歴史における出来事も、すべて因果関係の法則で、合理的に説明できない。このような立場をキリスト教はとることになる。
3. 歴史において神が人間を救いに導くために、働いている、あるいは、歴史を神の救いとの関係でみる、という救済史観をキリスト教は重視する。これは、人間の歴史は、人間の意思を越えたところに、その究極的な意味を求めなければならない、という考え方を示していると言える。
4. 神が世界と人間を創造した。また神が審判をする。つまり、歴史には、起源があり、また、終末がある、という歴史観。この点で興味深いのは、すでに本書の第19章31節で、2つの国、不正な人々の国と聖人たちの国について述べられ、この2つの国が人類の起源から世の終わりまで存続するとの考えを記して、後のアウグスティヌスの歴史観を展開している『神の国』に出てくる立場の基本的なものが見受けられる点である。そして、歴史は、ギリシャ人が考えたように、循環するのではなくて、繰り返しのきかない、直線で、起源から終末に向かって進んでいる、という歴史観においても共通性を見いだす。
5. もう1つ挙げれば、第27章53節にあるように、旧約聖書と新約聖書の関

係を、歴史における預言と成就という考えで関連付け、また解釈している点である。

以上指摘した歴史観は、1つの新しい歴史観と言えよう。そして、これは古代キリスト教徒が一般にいだいていたものである。しかし、そこにある問題点に気づいたり、あるいは、このような歴史意識をもって、資料にもとづき、歴史思想をまとめ、展開したひとがいたかという、いなかった。それにはアウグスティヌスの出現をまたねばならなかった。

ところで、アウグスティヌス自身、初期には上記のような歴史理解を受け継ぎ、それを教えていた。しかし彼はまもなくそれに疑問を抱くようになった。

たとえば、歴史の起源を神にある、と考え、また、その神は歴史を導いている、つまり、歴史を導くものは、歴史を越えたところにある、と信じるのはいい。しかし、これは、1元論であるため、神が造り、導いている歴史に、何故悪があるのか、が説明しにくくなる。また、現実の歴史をこの立場からどう説明したらいいのか。あるいは、歴史のなかで神が働き、人間を救いに導いている、という救済史観で、一般の歴史をみていいのか、という問題点。救済史と世俗の歴史の関係をどう理解したらいいのか。このような疑問からやがてアウグスティヌスの思索がはじまり、そして彼の歴史観が生まれてくる。

二

次にアウグスティヌスの代表作の一つ『告白録』(398-400)を取り挙げる。

本書はアウグスティヌスの前半生を記述した文学性に富む自伝としてよく知られている。ここに告白されている内容自体も意味深いものであるが、特に注意をひくのは彼の自らの過去の半生に対する執筆態度である。

アウグスティヌスは、まず、自分が過去において何をしたか、それはどのようなものであったのかを記述する。次に、外的出来事を叙述した後で、それとその時の自分の内面との関係を探り、自らの心理分析的な描写を試みる。そし

で最後に、過去の自分の外的・内的状況を、神という人間を超えた存在との関連で見つめ、自分の生涯とその出来事の意味を問い、検討する。

アウグスティヌスがこのような3つの視点から自己の半生を描写する方法には、彼の歴史意識ないしは歴史観が反映されている、と見なしうる。ここには、まず、過去を探り、ある出来事を選び、それを記述する、という態度がある。これは歴史、ヒストリアの意味するものと同じで、歴史の基本である。自分が何者かを知るには、自分の過去を、ルーツを探ることが大切だからである。過去から現在にいたる歩みを検討してみる、そのとき、現在の自分がわかる、と考えている。つまり、過去を問題にする1つの意味は、現在の自分をよりよく知るために他ならない。H. カーが『歴史とは何か』のなかで強調しているように、歴史とは、過去と対話することであり、過去と対話するのは、単に現在における自分の状況をよりよく認識するためだけでなく、将来への見通しをえるためでもある。

さて、アウグスティヌスの場合、過去の外的出来事の記述をするさいに、それと人間（内面）の関係に注目し、事実の認識の仕方を問題とする。これは、人間の内面の歩み、自我の形成史、精神史とみなされる側面である。個人の存在が明確に意識されにくかった古代において自伝を書くには、個としての意識が明確でなければならない。そしてこの態度は同時に、自分の生の有様をみつめ、そしてそれとの関連で自分の外的・内的生に影響を及ぼし、また意味をもつ出来事を選び記述する、という歴史の基本の一つを重視する結果になっている。この点がきわめて大切である。つまり、歴史は、過去の単なる事実ではない。過去の出来事をいくら多く並べても、歴史にはならない。あるいは、だれにでも確かな客観的な事実があるわけでもない。たとえば、これは1つの同じ事件をあつかった各種の報道をみればわかる。同じ事件でも、それに関する記述も報道も多種多様である。

アウグスティヌスはこのような態度で自伝を書いている。自分の半生のなかで、何が自分に影響を与えたのか、何により自分の人生が変わったのか、出来事であれ、本であれ、人物であれ、思想であれ、宗教であれ、どの出会いが自

分にとり、意味をもったのか、をいろいろな出来事からあるものを選びながら、それについて克明に描いていく。これが歴史的な態度である。自伝であるなら、そのひとの人生にとり意味のある事実を選ぶ、そして選んで解釈することで、歴史が書かれていく、と言えよう。

さらに、アウグスティヌスが本書でなしている自分の外的・内的歴史を神との関係で記述する試みは、歴史をある1定の視点からみて、批判し、検討し、解釈していく、という態度をあらわしてる。そしてこのように、何か視点がなければ、歴史を描くことはできない。たとえば、聖書を女性の視点から読むと、いろいろ疑問も起こり、また新たな問題の発見もある。あるいは、日本の歴史を、差別という視点から検討すると、今まで気づかなかった多くのことが明らかになる。現代的な視点であれ、または、唯物史観であれ、キリスト教的であれ、とにかく、自分なりに、歴史を見る眼をもつことが大切である。そして、そこから自分を、また過去や現在の歴史をみると、歴史の流れが見えてきくる。この意味でアウグスティヌスの自伝『告白録』は彼の生涯だけでなく、彼の歴史観を知る上できわめて貴重な作品であるが、それと同時に、歴史の基本を教えてくれという意味でも大切である。

三

次に、アウグスティヌスの歴史観を語るうえで欠かすことの出来ないのは、彼が晩年にまとめた『神の国』(413-426年)である。本書は当時の時代状況の中で生起した課題と取り組む過程で生まれたもので、内容は歴史に関する神学的、哲学的思索に満ちており、大変貴重な作品である。その内容である歴史観を採る前に、本書成立の事情を簡単にみておく必要がある。

ローマをたびたび脅かしていた西ゴート族は、410年8月、アラリクス王にひきいられて帝国の首都ローマ市に侵入し、3日におよぶ略奪を行なった。ローマ陥落のニュースは人々を震憾させた。強大な帝国の首都が破局を向かえたからである。永遠の都と言われたローマの陥落、不滅を信じられていたローマ帝

国にせまる危機。人々はおののき、震え、困惑する。この時、異教徒たちの間から、ローマの災難をキリスト教に帰そうとする動きが起った。彼らは、古来の神々をすてキリスト教の神を崇拝したのが災禍の原因であると主張した。国教の地位に安住していた教会は対応に窮した。「ローマについては沈黙せよ」がキリスト教徒の間での合い言葉になった。多くの避難民が難を逃れて、海を渡ってアフリカにきたので、そこで騒ぎが大きくなった。ヒッポの町で司教として働いていたアウグスティヌスは、他のキリスト者が黙しているこの問題について、何か発言するようにと友人たちから懇願された。

このような国家の危機的状況で、アウグスティヌスは歴史について改めて思索し始める。簡単にすまされる問題でも、事態でもなかった。彼は忙しさのなかで、研究し、思索し、歴史の問題と取り組む。そして、ただローマ帝国の歴史のみではなく、人類の歴史を問題とする視点を探索する。また救済史と一般の歴史の関係の問題についても、検討する。思索に思索を重ね、13年以上の歳月をかけ『神の国』全22巻を完成させた。

本書の序論で、彼は書いている。「これは大きな困難な仕事である、しかし、神が私の助主である。」

古代の百科全書とも呼ばれるこの大著を、それよりも、最初のキリスト教歴史哲学の書ともいわれ、ヨーロッパ文化に大きな影響を与えたこの重要な作品を、残念ながら今全体として詳しく取り上げることはできない。そこで、歴史観に関する点で、重要な面を、2つだけ選び、論じることにする。

ローマ帝国の歴史に関するアウグスティヌスの態度をまず取り上げる。

古代におけるローマ帝国とキリスト教徒の関係は、歴史的にみて、非常に微妙な面がある。そこで、この関連で当時のキリスト教とローマ帝国の関係を少し歴史的に概観してみよう。

キリスト教徒は、紀元1世紀に地中海の東部、パレスチナにおいて、宗教的にはユダヤ教からその基本を受け継ぎながら、文化的にはヘレニズムの世界に、イエス・キリストの生涯とその業に基づく新しい信仰者としての自覚をもって生まれた。イエスの弟子たちと使徒パウロおよびその協力者あるいは後

継者たちは、主として当時の共通語であるコイナー・ギリシャ語により、各地での宣教活動をとおして、信仰内容をまとめ、教会を作り、その制度を整えながら、ローマ帝国の世界にその仲間を増やし、3世紀ごろには、そのほぼ全域に広がっていった。そこで、このさい、キリスト教徒は、古代社会のさまざまな習慣、制度、宗教、思想、知的伝統のなかで、どのような自意識をもち、その周辺世界とどのように関わっていったのかが、問題となる。

ローマ帝国は、キリスト教徒に対して、はじめは他の宗教の信徒と同様に、寛容であった。しかし彼らの周辺世界との信仰による意識や生活、価値観の相違から、すでに1世紀から、また2世紀にも、局地的に迫害が起こり、殉教者が出た。3世紀の中頃と、4世紀はじめには、帝国による大がかりな迫害もあった。つまり、最初の300年間ほどは、キリスト教徒とローマ帝国の関係は、安定し、友好的な時代もあったが、ローマ帝国による激しい迫害により、困難な時もあった。しかし、4世紀初頭には、コンスタンティヌス大帝らによる宗教寛容令が出され、キリスト教徒にも信仰の自由が認められた。さらに、4世紀末には、テオドシウス大帝により、異教が禁止され、キリスト教はローマ帝国の国教の地位におかれる。

そこで、問いが生じる。国家により迫害された宗教がその国の国教になる、という歴史の激しい変転推移のなかで、特にローマ帝国がキリスト教化された後で、キリスト教徒はローマ帝国に対してどのような関わり方、どのような態度を取り、また、自分たちを、また、ローマ帝国をどのように理解したのであるろうか。

ここでもう1つ大切な要因は、キリスト教徒が単に地上の国とのみ関わりあいつつ生きている人間ではない点である。彼らには、イエス・キリストによって告げられた神の国に対する篤い信仰があり、それを重視して彼らは常に生きようとする。彼らは信仰により神の国の民とされ、それゆえ神の国を実現するために地上で宣教活動を行う。この信仰生活と宣教活動の拠点として、キリスト教徒はローマ帝国のあらゆる地方に教会を建て、そこに独自の制度を創り出し、その活動を強力に押し進めた。そこで彼らの時代の変転期における自己理

解と世界との関係、特にコンスタンティヌスの転換あるいはテオドシウスの体制以降、地の国、ローマ帝国との関わりは、当然ながら、彼らの神の国および教会との関係で問題となる。キリスト教会は聖なのか、俗なのか。キリスト教化されたローマ帝国は聖なのか、俗なのか。これが聖と俗(sacred and secular)の問題でもあり、また同時に、聖書の歴史と一般の歴史との関係、あるいは救済史と世俗史、聖書の啓示と世界の出来事との関連性を問うことにもなる。そこではこの時代のキリスト教徒は、一体世界に対して、当時の歴史に対して興味を抱いたのか。また、それをどのように問題にしたのか。問題にしたのは、どんな人々であろうか。

アウグスティヌス以前に、ローマ帝国の歴史に関してはキリスト教徒のなかに大きな2つの解釈の流れがあった。

1つは、ローマ帝国の歴史を神の摂理との関係で解釈し、その歴史上における特別な意義を認める立場で、もう1つは、まったく逆に、ローマ帝国を反キリストとみなし、キリスト教会に対立するものと解釈する立場である。

まず、第1の立場のものが多かった。2世紀後半にサルデイスのメリトンは、ローマ皇帝のもとで、また神の摂理のもので、ローマ世界は統一され、福音宣教に適應された、と考える。また、同じ頃、アレクサンドリアのオリゲネスは、イエスがアウグストゥスの治世にうまれたのは、神の摂理であった、と言う。最初の教会史家、カイザリアのエウセビオスは、コンスタンティヌス帝の支配を神の計画の1部だと主張する。同様な見解は、アウグスティヌスの師にあたる、ミラノのアンプロシウスにも、また彼の弟子の、スペインのオロシウスにも見られる。また、ブルデンティウスは、キリスト教を国教にしたテオドシウス大帝を評価し、ローマが神の特別な恩寵をうけている、という帝国神学を提唱する。

彼らが何を考えていたかは、比較的、理解しやすい。ローマ帝国が形成された時に、まさに満ちた時にイエスは誕生した。そして迫害があったが、その迫害をしていたローマ皇帝がキリスト教を保護し、その統一を願い、公会議を開いた。そして異教を禁止、キリスト教を国教化していく。それはまさに神の摂

理である。

アウグスティヌスも初期には、無反省にこの立場をとっていた。しかし、410年の出来事以来、歴史について熟考しはじめ、これを批判するようになる。

ところで、先にふれたようにローマ帝国の歴史における位置に関して、古代のキリスト教徒の間には、もう1つの解釈があった。それは、オリゲネスと同時代の人、ヒッポリトゥスに代表される見解である。彼は、黙示録によりローマ帝国はダニエル書の7章に描かれている4つの獣のうちの最後のものと同一視され、悪魔の国と見做された。

古代の1世紀から5世紀の間のキリスト教徒は、ローマ帝国の歴史について、この2つのいずれかの立場にたった。唯一の例外はアウグスティヌスである。

何故か。彼は410年の出来事を経験して、自分の過去を真剣に検討し始めた。また、外的だけでなく、自らの内的な、知的世界が揺り動かされる経験をした。その過程でアウグスティヌスは今まで当然と考えてきたことに対して、また、彼の同時代のひとびとの間では一般的であると考えられていたことに対して、疑問を抱くようになる。そして聖書を手がかりに自らとのたゆまない内的対話を持続しつつ、また、聖書を読み、かつ多くの歴史書をじっくり学びながら、ローマ帝国の歴史についての解釈をまとめていく。それに彼は13年間を要した。苦しい、泥沼的な思索の連続であった。そして、自分なりの見解をまとめ、発表していった。これが大著『神の国』である。

本書は三部からなる。第一部（第1巻-第10巻）は、異教徒のキリスト教批判に対する反論で、ローマの歴史は神とか運命という視点からではなく、ローマ人自身の問題として受けとめるべきだと指摘する。そして、いつの時代にも幸や禍があったことを挙げ、道德的退廃、物質的繁栄を重んじ精神面を軽視する態度、労働より搾取と贅沢を好む生活、権力拡大のための戦争、度を越した遊びと宗教的祭儀などが、勇敢で有徳なローマ人を墮落させ、したがってまたローマの歴史を危機に陥れたと、多くの例を挙げながら説く。そして、ローマ人の国家観、宗教観、歴史観などが批判される。

第2部（第11巻-第22巻）で、国家と歴史についてのキリスト教の立場を述べていく。特に第14巻から、2つの国とその起源、過程について対立するものとして論じ、そして第19巻では、この2つが歴史のなかで共通して求める目標としての平和の問題を取り上げる。

この本の表題にある「国」（*civitas*）とは、ギリシャのポリスに近いもので、市民共同体をさす。人間は社会的存在で、家族、社会、国家を形成する。問題はこのような人間の共同体がいかなる原理によって支配されているかである。本来は、愛と正義、相互の扶助と奉仕、平和と秩序によるべきである。ところが、現実の歴史はその反対の状況を示す場合が多い。それは何故なのか。それが本書の主題である。

本書の詳しい内容はさておき、結論をまず先取りして述べると、アウグスティヌスは、ローマ帝国の歴史に対して、エウセビオスの伝統をくむメシヤ的イメージをくむ立場も、あるいはヒッポリトゥスの伝統をくむ反キリストとしての黙示文学的イメージの立場もとらず、むしろこの両者を否定した。国家は神の摂理の道具でもなければ、悪魔的なものでもない。神学的にはまったく中立である。ローマ帝国は、悪魔的なものとし拒絶さるべきではなく、また聖なるものとして賞賛さるべきでもない、とアウグスティヌスは考えた。

これは、歴史の世俗化を意味する。この考えにより、アウグスティヌスは、かつて自らのおこなった聖書の歴史を、または救済史を一般の歴史に導入して、それに関わらせることを批判し、拒否するようになる。教会の歴史は聖ではないし、また一般の歴史は俗ではない。アウグスティヌスは、歴史を聖と俗、また、救済史と一般の世界史にわけることに対する。そして彼は、聖なる歴史、または、救済史を聖書の中に限定した。

次に、『神の国』のなかにあるアウグスティヌスの歴史観で大切な点を2つ取り上げてみたい。1つは、歴史を動かしている原理の問題、もう1つは、歴史の現実の状態に関わる。

まず、歴史の原理について。

アウグスティヌスは、本書の第2部（第11巻-第22巻）で、歴史は神の国と地の国の対立、抗争の場である、というよく知れた考えをのべている。そして、この2つの国の起源、発展過程、終結を取り上げ、現実の歴史とからませながら論じていく。

ここにわれわれは、アウグスティヌスの歴史観の1つの基本をみる。それは、歴史には、歴史を動かしている原理がある、という考え。そして、その原理は、なにか歴史を越えたものではなくて、歴史の中にあるということ。

そこでこの歴史を動かしている2つの原理、神の国と地の国とは、何かというと、アウグスティヌスは次のように説明している。

第14巻でアウグスティヌスは2つの国を分つ2つの原理について述べる。

「2つの国は2種類の愛に基づいている。地の国は自己愛に基づき、神の国は神への愛に基づいている……」。

アウグスティヌスは歴史を動かしている原理を問題にしているが、ここで大切なのは、この原理が、理論、あるいは制度、構造ではない、ということ。しかも、その原理は人間に関わらせてある、という点。つまりアウグスティヌスは、人間の2種類の愛が歴史を動かす原理だと考えている。それはどういう意味であろうか。

自己愛は人間の存在と平和を脅かすすべてのもの、政治的、経済的、軍事的、思想的、宗教的弾圧、支配など、自己のための欲望追求と権力拡大をはかる傾向をさす。これに対し、人間の存在を尊び、その平和を重んじる生き方が神への愛の特色である。自己愛にもとづく地の国は、人間が被造物であることを忘れ、自らを神格化したり、他者を支配しようとする。そこでは略奪、不義、戦争が行なわれる。これを防ぎ、これと戦うのが神への愛にもとづく神の国の民である。歴史の中には、いつもこの2つの愛があり、この2つの国の抗争が見られる、とアウグスティヌスは説く。

ここには、ギリシャ的な国家観、ないしは、歴史観にたいする批判がこめられている。ギリシャでは、ポリスである都市国家が人間を育て、導き、完成させる過程が歴史であった。アウグスティヌスは、国家や歴史に教育的な意味や、

救済的な意味をあまり持たせていない。そして、ボリスにあたるラテン語の、キヴィタスを用いて、歴史を2つのキヴィタスの抗争の場とみなす。

アウグスティヌスがこのように考える背後には、彼がパウロから学んだ人間理解がある。パウロによると、人間は罪人で、しかし同時に、恵みにより義とされる。善を欲しながら、その欲している善をなさずに、むしろ憎んでいる悪をなす存在であるが、それでも神に愛され、恵みをうけられる存在である。罪と恵みの間をさまようのが人間である。罪と恵みの間で葛藤する人間。善と悪、目標への前進とそこからの挫折に悩む存在である人間。歴史だけでなく、人間自身が、自己愛と神への愛の葛藤のなかにあり、2つの愛の抗争の場であると言えよう。そして、この人間の状態が歴史を動かす原理にはかならない。

歴史は人間がつくる、という立場は、アウグスティヌスによると単にパウロだけではなくて、聖書全体からもいえる。

聖書によれば、神によって男と女に造られた人間は、社会的な存在であり、家庭、社会、国をつくり、そして、一緒になり歴史を形成していく。つまり、人間は神の像として、魂と理性と身体をもって互いに交わり、愛し合い、助け合い、奉仕をしあって、共同体をつくり、歴史を押し進めていく。

ところが、現実の人類の歴史は、人間のもつ、自己愛のゆえに、支配欲、所有欲があり、みな自己の利益を優先させようとするため、人間同志、争いが絶えなくなる。また、歴史において、人間の社会には不義、不平等、差別などが生じる。そこで人間は、歴史のなかで共同体をつくり、国を造り、そして国によりその構成員である人間を配慮し、保護し、そしてその幸福と利益を守り、人間社会全体の調和、平和、秩序を守ろうとした。この意味で、国家は、人間の歴史においても大切な制度である。国のあり方により、人間の歴史はおおきく影響されるからである。

ところが、国とは何かというと、アウグスティヌスによれば、それは人間から成り立っているものである。それゆえ、そこにもまた、当然自己愛が働いている。そのため、すでに述べたように、国も自己の利益を優先させ、富の増大をはかり、弱者を支配し、他者から奪い取ることにより、自己を強大にしよう

とする。自己愛に支配されている国は、外に対しては支配を強化するために、権力の拡大、土地の搾取、武力の競争、戦争、侵略を企てる。そのため、いわゆる帝国主義的になってしまう。また、他方、国家は、その務めである、国内の秩序と安寧を維持するという名目で、権力をもち、またそれを行行使する。たとえば、国内の凶悪な行動を押さえなければ、国家は無政府状態になり、存在が危なくなりかねない。そこで、それ自体、自己愛に支配されている不完全な国家は、悪を取り締まるために、法を制定する。その結果、国家は、警察国家的な性格を帯びることになる。ここに人間の社会と歴史の矛盾と悲劇がある、とアウグスティヌスは考える。

そこでアウグスティヌスは自問する。歴史のかで、平等と公平な配分を保証する正義を失っていない国家があるだろうか。不正な裁判、土地をめぐる争い、権力の争奪、弱肉強食の経済競争、地位と名誉をもとめての駆け引き、親子、男女間の憎しみあいはあとを絶たないし、王や支配者で、略奪、残忍、策略、欺瞞によらずにその政権を得たものがいるだろうか。暴力や偽善、利己心や支配欲なしに成就した革命があるだろうか。口では平和を叫んでも、軍備を放棄し、戦争を欲しない国があるだろうか。この状態から、自己愛が歴史を動かしている原理であることは、明白になる。

このようにみると、人間の歴史は絶望的であり、この状態は簡単に改まらないどころか、もっと続くように見える。どうしたらいいのか。アウグスティヌスは何というのか。

ある人は、アウグスティヌスは自己愛を地の国の原理とみなしているので、この状態は当然だとしても、神の国は、神への愛の原理に支配されているので、状況はことなり、そこに希望も解決もある、と考える。また、ある人は、アウグスティヌスは、神の国により、教会をさし、地の国により、具体的には、ローマ帝国をさしている、と解釈する。そこで、自己愛に支配されている地の国を、教会は神の国にするために、努めなければならない。そこに、解決がある。つまり、歴史は、2つの国、地の国と神の国、その異なる2つの原理、自己愛と神への愛に基づいており、その両者の抗争の場である。そこで、地の国を神の

国にすれば、問題は解決する。それを果たするのが教会である。と解釈する。しかし、この解釈は間違いである。アウグスティヌスがそうに考えていないことは、確かである。では、アウグスティヌスはどうか考えているのか。

ここで大切な点が2つある。その1つは、アウグスティヌスが歴史を動かす原理として、地の国と神の国を上げる場合、それは、あくまでも神学的な区別を意味する原理であって、現実の歴史における社会学的な区別ではない、という点。もう1つは、アウグスティヌスは、現実の歴史の状況を考える場合には、この2つの国、この2つの原理が区別しがたく入り交じりあっていることを重視し、そしてその状態をサエクルムと呼んでいる点である。この2点について、少し、説明を加えておく。

ここでいう2つの国は神学的な原理であるゆえに、これを現実の状況にあてはめ、たとえば、地の国を地上の具体的な国家とみなし、また、神の国を教会と等置することは間違っている。あるいは、あの人は地の国に属し、このひとは神の国に属している、と考えてもいけない。アウグスティヌスによると、地上の具体的な国のなかに、自己愛と神の愛の2つの原理がはたらいており、また、教会にも、また、1人の人間のなかにも、この2つの原理が働いている。つまり、国家だけでなく、教会のなかにも、支配欲、差別、偽善、悪、不義、憎しみ、争いがある。アウグスティヌスによれば、これも当然である。なぜなら、教会は人間の集まりであり、人間は罪人だから。国家にも、教会にも、罪がある。ここ意味でアウグスティヌスは、歴史における教会を聖なる場所とみなさず、むしろ世俗化している。ただここで大切なのは、それでも、神の国と地の国が共に存在することを神が認めている事実である。どんなに罪にみちていても、国家も教会も歴史のなかでその存在を許されている。それは、我々人間が罪人であるにもかかわらず、この歴史のかで存在を許され、生かされているのと同じである。

次に、アウグスティヌスの歴史の現実に関する見解を取り上げる。

先に述べたように、アウグスティヌスは歴史の世俗化を行った。国家も、教

会も、聖なるものではない。では歴史はどのようなものか。アウグスティヌスは、人間のおかれている現実の歴史的現実をサエクルムと呼ぶ。

サエクルムは、ラテン語で、日本語に訳しにくい。歴史の現在における人間と世界とそこにあるすべての制度などをさす。普通は「世」、「時代」、あふいは、「世界」「世代」などと訳す。アウグスティヌスによると、神は世界を造り、人間をそこに住ませた。つまり、神は時間と空間をつくり、そこに人間を置かれた。これは、人間が歴史のなかで生きていくことを意味する。この人間の生きている歴史的な世界が、サエクルム、この世、この時代にほかならない。

この言葉には、神の国との関連で、神学的な意味が込められている。アウグスティヌスの『神の国』によれば、この地上では、また人類の歴史では、神の国と地の国が、したがって、その2つの国の民が、2つの愛が入り交じりながら終末に向かっている。この2つの国が絡まり合っている現実の世界、またそこでの時間的な生が、サエクルムである。つまり、アウグスティヌスは、歴史を聖と俗に分けずに、また、終末までは2つの国は区別できないし、人間がかってに区別したらいけない、という立場をとる。これは、アウグスティヌスが2つの国が共に関与している歴史上の様々な出来事の領域をさすサエクルムを、人間の歴史的現実として重視していることを意味する。そしてサエクルムを重視するとは、人間が今生きているこの世界、この世、この時代と深く関わりながら生きていくことの大切さを示唆する。ここからアウグスティヌスのサエクルムの神学が生まれてきた。つまり、自らの生きている世界と関わりながら、その時代の問題について思索する、それゆえに、たとえば、社会、教会、国家、などについての神学を構築したといえよう。

以上の考察でアウグスティヌスの歴史を動かしている2つの原理とその意味については、明らかになったと言えよう。そこで、最後の問題は、人間は歴史のなかで、どのように生きたらいいのか、あるいは、歴史の目標は何か、という点である。

アウグスティヌスはすでに見たように、歴史のなかで歴史を動かす2つの原理、2つの愛により、地の国と神の国が争っている、とみなしているが、しか

し、この2つの国は対立しているだけでなく、共通した面をもっているとも考えている。それは、何か。それは平和である。アウグスティヌスは、『神の国』の第2部で、つまり、第11巻以降で、特に第14巻から、2つの国の起源と過程について、それらが対立するものとして論じている。しかし、第19巻になると、この2つが歴史のなかで共通して求める目標としての平和を取り上げている。そして、たとえ困難でも、永遠の神の国の平和を目指し、人間の存在を脅かす力に立ち向い、戦い続けることを勧め、そこに歴史の意味と人類の目標をみる。